

大学生の対人支援ボランティア場面におけるストレス評価を 緩和するソーシャルサポートの検討 — 参加動機の観点から —

亀田 凌雅・中地 展生

問題

1. 大学生におけるボランティア活動

大学生の課外活動の選択肢の1つとして、ボランティアが挙げられる。ボランティアとは、安島(2003)によると「営利を目的とせず、社会の福利向上のために自発的に貢献しようとする人々」と定義される。日本学生支援機構(2009)によると、私立・国公立大学ともに約80%が学内にボランティアに関する部署が設置されており、このことから大学側がボランティア活動を推奨していることが見て取れる。また、厚生労働省社会・援護局地域福祉課(2007)によると、「交流・遊び」「話し相手」や「配食・会食サービス」「外出・移送サービス」といった生活支援活動が多くのボランティアによって提供されており、地域の要支援者の普通の暮らしを支える重要な役割を担っていると述べている。

これまでボランティアの研究においては基本的に「他人のため」のボランティア活動に焦点を当てた検証が行われてきた。しかしながら、近年では、ボランティア個人の生き甲斐や楽しみ、自己実現の観点からボランティアが論じられるようになってきている(広崎他, 2006)。妹尾・高木(2003)は、ボランティアとなることは援助者の愛他心を高め、人間関係を広げ、人生への意欲を高めるといったポジティブな影響がある可能性を示している。近年ではそのような効果に着目して、「自分のため」にボランティアに参加する学生も見られる。ボランティアの継続期間と動機の関連について、「充足願望」は活動開始時と比べ継続時において低くなる一方、「社会的責任」は活動開始時よりも継続時に高くなる(石本, 2004)など、ボランティア活動の継続は肯定的な自己変容をもたらす可能性が考えられる。

2. ボランティア活動の中断・バーンアウト

こうしたボランティア活動について、中断してしまう例も存在する。中断の理由はさまざまであるが、理由の一つとして、バーンアウトが挙げられる。Lazarus & Folkman(1984)によると、心理学の分野におけるストレスは、外界の刺激(ストレスor)とそれによって惹起されるストレス反応、そしてストレス反応を低減するためになされる対処方略(コーピング)からなる一連の過程をストレスと捉えている。小山他(2003)で挙げられるように多くの先行研究で対人援助職はストレスが多い仕事であることが指摘されており、バーンアウトは職業病とまで言われている。ボランティアであってもバーンアウトの問題は注目されている。安島(2002)では多くの非営利組織がボランティアという人的資源のマネジメントに関して共通の悩みの1つとしてボランティアのバーンアウトを挙げ

ており、その実証的研究として、吉田・徳田(2012)では対人支援ボランティア活動の参加者においてもバーンアウトが起こることを報告している。

米澤(2010)は、ボランティアの活動の休止希望を高める要因として「相談相手がいない」「時間的制約」などを挙げている。ストレスorという観点では、ボランティア活動者は当事者との関わり、人間関係や組織・環境などに対して悩みを持っていることが報告されている(皆川, 1999)。岩佐・山本(2008)は対人支援ボランティアでの活動中のストレスor尺度を作成し、「仲間から受けるストレスor」「スキル不足から生じるストレスor」「対象者から受けるストレスor」という3因子を見出した。亀田・中地(2021a)は、この尺度に認知的評価の側面が不足していることを指摘し、新たに「自己不全感」「対象者との関わり」「スタッフとの関わり」という3因子による尺度を作成した。亀田・中地(2021a)ではこの3因子がバーンアウトとの関連を示していることが報告されている。このことは対人支援ボランティアに参加する大学生に対しての支援の必要性の証左であると考えられる。

3. バーンアウトの緩和要因

こうした活動のバーンアウトを抑制する可能性のあるものとして、本研究ではソーシャルサポートに着目する。橋本(2005)をはじめとして、ソーシャルサポートはストレスを低減・緩和する要因として扱われていることが多い。

しかしながら、菊島(2002)は大学生用ストレスor尺度の下位因子である「学業ストレス」「アルバイトストレス」には親や友人の誰から提供されたソーシャルサポートであっても、関連が見られなかったことを示している。このことから、ストレスorによってはソーシャルサポートが効果を及ぼさない場合が存在するということが考えられる。また、岡安他(1993)でも、ソーシャルサポートによるストレス反応の低減効果がサポートの受け手の属性や、サポート源によって異なるという結果が報告されている。菊島(2003)はソーシャルサポートがネガティブな効果を生じさせる場合について報告している。これらのように、被援助者(サポートの受け手)と援助者(サポート源)の属性や要因はサポートの効果に影響することが考えられ、場合によってはネガティブな効果をも生じさせる可能性がある。ここでいう属性とは性別や援助者-被援助者の立場や関係などが挙げられるが、ボランティアにおいてはその他にもいくつかの要因が考えられよう。

4. サポート効果に影響する可能性がある要因

まず、援助者の要因として本研究ではソーシャルサポートの種類に注目したい。ソーシャルサポートには内容によ

る分類が多くなされており、和田(1989)は先行研究に基づき、「情緒的サポート」「所属的サポート」「情動的サポート」「道具的サポート」「評価的サポート」の5つに分類している。また、片受・大貫(2014)はそれまでこれらの分類を網羅した尺度がなかったことから、新たに新大学生用ソーシャルサポート尺度を作成している。片受(2016)ではソーシャルサポートと抑うつや不安との関連を検討しており、ソーシャルサポートの効果の有効性を示しているが、サポートの種類によって関連の強さが異なったという結果を示している。このことから、ストレス評価という要因に対して、ソーシャルサポートの種類による効果や影響度の違いは生じうると考えられる。こうした点も踏まえて、サポートの種類とストレスとの関連を検討しておくことは、今後の支援を検討するうえで重要な根拠となるだろう。

次に、被援助者の要因としては、ボランティアへの参加動機に着目する。ボランティアの参加動機について、一般的には「利他的動機」と「利己的動機」に概念的に分類する2因子説(富重, 2002)が著名である。加えて、日本国内での研究における特徴として、断ることが難しい相手から頼まれて参加する「組織的義務動機」(田引, 2005)や「依頼動機」(田引, 2008)の存在が挙げられる。これらの動機も研究によって名称が異なったり、それによって若干の定義の差異があったりするものの、山本(2018)では「他者志向動機」(「利他的動機」に相当)と、「自己志向動機」(「利己的動機」に相当)に加えて、「要請動機」(「組織的義務動機」「依頼動機」に相当)を加えた3因子での研究がなされている。山本(2018)は「自己志向動機」と「他者志向動機」はボランティア活動による心理的報酬を高めており、直接的ないし間接的に活動意欲を高める結果であった一方で、「要請動機」のみが活動中のネガティブ体験を高め、体験後の援助成果を間接的に低める結果となっている。ここでのネガティブ体験尺度は「役に立てなかった」「活動の中でイヤだと思う出来事があった」といった項目から構成されている。これらは亀田・中地(2021)が示したストレスである「自己不全感」などの因子と類似した概念であると考えられる。つまり、活動に臨むにあたっての動機がストレス評価やその後の成果などに関連してくると考えられ、この点から、参加動機を含めた検討は重要であると言えるであろう。これらを踏まえ、亀田・中地(2021b)は、ボランティア学生が期待するサポートの種類に焦点を当て、ストレスと参加動機との関連を検討し、その結果、参加動機によってストレスの受け取り方や、期待するサポートが異なることが明らかにした。また、同研究では「自己志向動機」が高いものの「スタッフとの関わり」が上手くいっていない場合において「評価的サポート」を求めているといったように、交互作用も見られている。このことから、サポートの効果を検討するうえでもこれらの要因は、サポートとストレス、サポートと参加動機という単独での検討ではなく、複合的な検討が必要である

と考えられる。

5. 目的

本研究では、対人支援ボランティアを安島(2003)の「営利を目的とせず、社会の福利向上のために自発的に貢献しようとする人々」という定義を参考に、対人支援に関わる活動(ボランティア活動)を行う者を本研究における対人支援ボランティアとする。そのうえで、対人支援ボランティアへの参加動機と実際に受けたと知覚しているサポートの組み合わせが、ストレス評価とどのように関連しているのかを検討することを目的とする。

方法

調査対象者

対人支援ボランティア経験を有する国内大学に在学する大学生及び、アイブリッジ株式会社にモニターとして登録する大学生152名が回答した。

手続き

オンラインの回答フォーム(Googleフォーム/Freeasy)を用いて調査を実施した。調査時期は2022年11月～2023年1月であった。

調査項目

(1)属性 属性として、性別、年齢、学年を尋ねた。

(2)対人支援ボランティアの経験についての項目 まず、本調査における用語の定義について文中に記載した。「ボランティア」という語の定義として、安島(2003)による定義を直接引用にて記載し、本調査においては、「対人支援に関わる上述の活動(ボランティア活動)を行う人を指す」ことを補足した。「ボランティア先」とは、「ボランティア活動を行う施設などの場所」を指すこと、「スタッフ」については「ボランティア先の教職員など、施設に雇用されている者」として説明し、「対象者」については「対人支援ボランティアにおいて、支援の対象となる者」とした。

次に、実際のボランティア体験の中でのストレスに焦点を当てるために、対人支援ボランティアの経験について「1.現在、参加している」「2.現在は参加していないが、過去に参加していた経験がある」「3.参加した経験がない」から回答を求め、1または2に回答した参加者には活動していた中で最長の活動期間(月数)及び活動内容について自由記述で尋ねた。3と回答した調査参加者には、以降の項目への回答を表示せず、回答を終了する設定とした。

(3)対人支援ボランティア場面ストレスについての項目 亀田・中地(2021a)の大学生用対人支援ボランティアストレス尺度を用いた。本尺度は「自己不全感(12項目/項目例:自分に対して出来ていないということを感じる)」「対象者との関わり(9項目/項目例:こちらから働きかけたことに対して、対象者が違う行動をする)」「スタッフとの関わり(7項目/項目例:情報を共有してくれない)」の3因子28項目で構成されている。まず、各項目について「ほとんどない(0点)」から「よ

くある(3点)」までの回答してもらい4件法で尋ねた。次に、同じ項目について、不快度を「全然嫌に思わなかった(0点)」から「非常に嫌に思う(3点)」までで回答してもらい4件法で尋ねた。同じ項目について体験頻度と不快度の得点を掛け合わせて、この項目についてのストレス得点として用いる(得点範囲0~9点/項目)。本尺度は、得点が高ければそのストレスが大きいものであると考えられる。

(4) 努力の最小限化を検出する項目 三浦・小林(2018)を参考に、Directed Questions Scale (以降、DQS : Maniaci & Rogge, 2014)2項目を対人支援ボランティアストレス尺度に含めた(項目例:この項目では「ほとんどない」を選んでください)。DQSは、「尺度項目を精読しない努力の最小限化を検出するための方法で、多数の項目からなるリッカート尺度に、選択すべき選択肢を指示する項目を含め、指示通りの選択がなされたかどうかによって判定する」方法(三浦・小林, 2018)である。

(5) ボランティア活動の参加動機についての項目 山本(2018)で作成されたボランティアの参加動機に関する項目を用いた。この尺度は、「自己志向的動機(6項目/項目例:自分を成長させることができるから)」「他者志向的動機(3項目/項目例:困っている人を助けるのは当然のことだから)」「要請動機(3項目/項目例:学校の先生から参加するように言われたから)」の3因子12項目で構成されている。5件法で「1.あてはまらない」から「5.あてはまる」までで尋ねる。なお、山本(2018)の研究は対象者が中学生であるが、本尺度の項目は大学生に適用しても問題のない範囲であると考えられる。本尺度の得点が高ければボランティア活動への参加動機が高いと考えられる。

(6) ソーシャルサポートについての項目 片受・大貫(2014)で作成された新大学生用ソーシャルサポート尺度を用いる。本尺度は「評価的サポート(10項目/項目例:あなたの成果に感謝してくれる)」「情報・道具的サポート(7項目/項目例:問題解決方法について、アドバイスしてくれる)」「情緒・所属的サポート(6項目/項目例:一緒に遊びに出かけてくれる)」の3因子23項目で構成されており、それぞれの項目について「1, 全くあてはまらない」から「4, 非常にあてはまる」の4件法で尋ねる。本尺度の得点が高ければ、その種類のソー

シャルサポート知覚が高いと考えられる。

倫理的配慮

調査の目的、自由意思による回答、個人情報やプライバシーの保護など、研究上の倫理についての説明を文面で十分に説明し、回答をもって合意したものとした。上記について、筆頭著者が在籍する大学の研究倫理委員会にて承認を得て調査を実施した(承認番号4-28)。

結果

1.分析対象者の属性

回答が得られた152名中、活動内容が明らかに対人支援とはかけ離れている回答や、DQSの不通過者を除いた132名(男性17名、女性114名、その他1名;1年生17名、2年生21名、3年生45名、4年生49名)を有効回答として以降の分析に用いた。有効回答者の平均年齢はM=20.87歳 (SD=1.29)、対人支援ボランティアの平均継続期間はM=9.25か月(SD=11.35)であった。

2.記述統計量

まず、使用した変数の傾向を示すために、Table 1に各尺度の因子の平均値および標準偏差、α係数を示す。因子得点については、因子を構成する各項目の粗点を合算し、それを項目数で除した値を記載している。

Table 1
使用した変数の記述統計量及びα係数

変数名	平均値	標準偏差	α係数
自己不全感	2.75	1.78	.89
対象者との関わり	2.07	1.33	.81
スタッフとの関わり	1.98	1.45	.77
自己志向	3.72	0.70	.67
他者志向	3.23	1.06	.81
要請	2.11	0.98	.62
評価的	3.09	0.51	.90
道具・情報	3.08	0.48	.83
情緒・所属	2.80	0.67	.83

註) 因子名は短縮して記載。

3.相関係数

次に、変数間の関係を確認するために相関分析を行った(Table 2)。

Table 2
変数間の相関係数

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1 継続期間	—									
2 自己不全感	-.04	—								
3 対象者との関わり	-.04	.70 ***	—							
4 スタッフとの関わり	-.12	.71 ***	.76 ***	—						
5 自己志向動機	-.05	-.02	-.02	-.14	—					
6 他者志向動機	.03	-.01	.04	-.06	.49 ***	—				
7 要請動機	-.17 *	.04	.21 *	.12	-.13	.16	—			
8 評価的サポート	.00	-.13	-.22 **	-.24 **	.46 ***	.23 **	-.02	—		
9 道具・情動的サポート	.03	-.13	-.15	-.21 *	.54 ***	.29 **	-.10	.68 ***	—	
10 情緒・所属的サポート	-.01	-.12	-.04	-.10	.44 ***	.33 ***	.07	.62 ***	.56 ***	—

*** p < .001, ** p < .01, * p < .05

4.参加動機とソーシャルサポートが対人支援ボランティアストレス評価に与える影響

参加動機とソーシャルサポートの下位因子がストレス評価の各下位因子に与える影響を検討するため、目的変数をストレス評価の各下位因子、説明変数としてStep1に参加動機の下位因子、Step2にソーシャルサポートの下位因子、Step3に参加動機とソーシャルサポートの下位因子ごとの交互作用項を追加する階層的重回帰分析を行った。

分析の結果、「自己不全感」を目的変数とする分析では、いずれのStepでもVIFは1.10～5.53までの範囲であり、多重共線性はないものと考えられたものの、決定係数が有

意でなく解釈できるモデルはないと判断した(Table 3)。「スタッフとの関わり」では、いずれのStepでもVIFは1.10～5.53までの範囲であることから多重共線性はないと考えられたが、決定係数が優位でないため解釈できるモデルがないと判断した(Table 4)。最後に、「対象者との関わり」において、VIFは1.10～5.53までの範囲で多重共線性はないものと考えられた。Step2と3の決定係数が有意であり(順に $R^2=.12$, $p<.05$; $R^2=.24$, $p<.01$)、Step2からStep3への決定係数の増分が有意であったため($p<.05$)、Step3を採択した(Table 5)。

Table 3
「自己不全感」を目的変数とした階層的重回帰分析

変数名	Step1	Step2	Step3
自己志向動機	-.03	.24	.24
他者志向動機	-.01	.01	.01
要請動機	.07	.08	.08
評価的サポート		-.25	-.50
道具・情動的サポート		-.36	-.35
情緒・所属的サポート		-.17	.07
自己志向動機*評価的サポート			-.30
自己志向動機*道具・情動的サポート			.07
自己志向動機*情緒・所属的サポート			.14
他者志向動機*評価的サポート			-.58
他者志向動機*道具・情動的サポート			.52
他者志向動機*情緒・所属的サポート			.36
要請動機*評価的サポート			1.45 ***
要請動機*道具・情動的サポート			-1.19
要請動機*情緒・所属的サポート			-.53
R^2	.00	.03	.13
ΔR^2		.03	.10

*** $p < .001$

Table 4
「スタッフとの関わり」を目的変数とした階層的重回帰分析

変数名	Step1	Step2	Step3
自己志向動機	-.23	.01	-.04
他者志向動機	-.04	-.05	-.01
要請動機	.17	.16	.14
評価的サポート		-.63	-.86 *
道具・情動的サポート		-.28	-.17
情緒・所属的サポート		.20	.32
自己志向動機*評価的サポート			-.78
自己志向動機*道具・情動的サポート			.59
自己志向動機*情緒・所属的サポート			.01
他者志向動機*評価的サポート			-.32
他者志向動機*道具・情動的サポート			.20
他者志向動機*情緒・所属的サポート			.29
要請動機*評価的サポート			.29
要請動機*道具・情動的サポート			-.30
要請動機*情緒・所属的サポート			-.08
R^2	.03	.08	.12
ΔR^2		.05	.04

*** $p < .01$, * $p < .05$

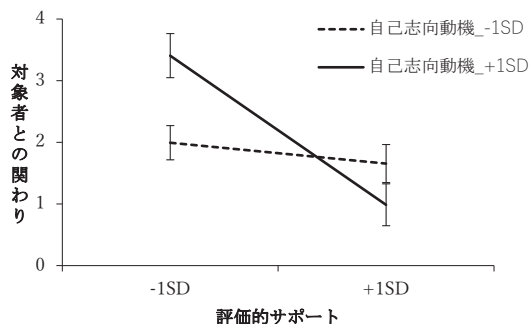
Table 5
「対象者との関わり」を目的変数とした階層的重回帰分析

変数名	Step1	Step2	Step3
自己志向動機	.01	.26	.26
他者志向動機	.00	-.02	-.05
要請動機	.28 *	.29 *	.30 *
評価的サポート		-.84 *	-1.35 ***
道具・情報のサポート		-.13	.26
情緒・所属的サポート		.23	.39
自己志向動機*評価的サポート			-1.45 ***
自己志向動機*道具・情報のサポート			.80
自己志向動機*情緒・所属的サポート			.57
他者志向動機*評価的サポート			-.28
他者志向動機*道具・情報のサポート			.45
他者志向動機*情緒・所属的サポート			-.03
要請動機*評価的サポート			.50
要請動機*道具・情報のサポート			-.49
要請動機*情緒・所属的サポート			-.25
R^2	.04	.12 *	.24 **
ΔR^2		.07 *	.13 *

*** $p < .01$, ** $p < .01$, * $p < .05$

「対象者との関わり」に対して有意な主効果を示したのは「要請動機」($\beta = .30$)と「評価的サポート」($\beta = -1.35$)であった。また、交互作用項が有意であったため、単純傾斜分析を行ったところ、「自己志向動機」の低い群においては「評価的サポート」の効果は低いものの、「自己志向動機」が高い群では「評価的サポート」の効果が高く、「対象者との関わり」によるストレス評価を緩和していることが明らかとなった(Figure 1)。

Figure 1
「自己志向動機」と「評価的サポート」が「対象者との関わり」に与える影響の単純傾斜分析



考察

1. 参加動機とソーシャルサポートが対人支援ボランティアストレスに与える影響

本研究では、対人支援ボランティアへの参加動機と知覚されたサポートの組み合わせが、ストレス評価とどのように関連しているのかを明らかにするために、階層的重回帰分析を用いて検討を行った。その結果、「対象者との関わり」において有意なモデルが示された。

「対象者との関わり」において有意な主効果を示していたのは「要請動機」と「評価的サポート」であった。まず、「要請

動機」が「対象者との関わり」におけるストレスを高めてしまうという結果は亀田・中地(2021b)による結果と同様であった。また、山本(2018)は「要請動機」が活動中のネガティブ体験を高め、体験後の援助成果を間接的に低める結果を示している。「要請動機」によって活動に参加した学生は、活動に対して自発的な参加をしたわけではない学生たちである。対人支援ボランティアのある意味核となる体験である対象者と関わるという行為に対してメリットを感じられず、自身のコントロールの及ばない“ストレス”として認知してしまう可能性が高いのだと考えられる。

次に、「評価的サポート」は「対象者との関わり」を低減する効果が見られた。亀田・中地(2021b)は「対象者との関わり」によるストレスを大きく認知している大学生の期待するサポートとして「評価的サポート」を挙げている。本研究の結果を踏まえると、大学生の期待するサポートである「評価的サポート」が、ストレス評価を実際に緩和する可能性が考えられる。和田(1989)は、「評価的サポート」を肯定、フィードバック、社会的比較などから、尊重され受容されているという情報をもたらしてくれるサポートであると説明している。「対象者との関わり」の中には、一定の専門性を求められる対象者との接触も含まれることが想定されるが、そうした中で上手くいかないという体験が積み重なると、それは大学生にとっては大きなストレスとなってしまふことが考えられる。しかしながら、亀田・中地(2021a)は「対象者との関わり」はストレスの3因子の中で唯一バーンアウトに影響を与えていないという結果を報告しており、「対象者との関わり」によるストレスは活動の中で消化できるものであると考えられる。今回の結果を踏まえると、ボランティア活動者にとって、「対象者との関わり」の場面において、上手くいかないなりに取り組んだことに対して、ボランティア先(現場側)が肯

定的に認めてくれるという体験があることで、そうしたストレスラーが重大なストレス反応にまで至らないのではないかと考えられる。

次に交互作用項についてであるが、本研究では「対象者との関わり」に対して、「自己不全感」と「評価的サポート」の交互作用が認められた。単純傾斜分析の結果、「自己志向動機」の低い場合においては「評価的サポート」の効果は低い、「自己志向動機」が高い場合では「評価的サポート」の効果が高いことが明らかになった。「自己志向動機」は自身を高めるために活動に自発的に参加するという側面を持つ動機である。以上のことを踏まえると、「自己志向動機」が高い人は具体的かつ肯定的なフィードバックを受けることで、「対象者との関わり」というネガティブな体験に対し肯定的な意味づけを行うことが可能となると考えられる。意味づけは出来事が起きた意味を探求・理解しようとする認知的コーピングおよびその過程である(Park, 2010)。Bower et al.(1998)は、意味づけはストレスフルな出来事を体験した人たちの精神的・身体的回復に有益な影響を与えることを示した。また上条・湯川(2014)は、ストレスフルな体験そのものはあくまで原因に過ぎず、意味づけを行うためにはその出来事に対しての自己内省が必要であると述べている。これらを本研究の結果と合わせて考えると、「評価的サポート」が自己内省を促す要因となった可能性があるだろう。

2.具体的な支援について

本研究で示された結果やその考察を踏まえ、重要なのはその支援である。安島(2003)のボランティアの定義に含まれるように「自発性」ないし「主体性」はボランティアの柱となる概念である。そうした中で「要請動機」のような動機で活動に参加する学生がいる背景には、ボランティア活動を職業体験や職業的スキルを高めるための活動との混同や、元のボランティアイメージによる影響が考えられるだろう。

ボランティア活動は自己成長につながるような肯定的側面があることは多くの先行研究で示されてきている(例えば、妹尾・高木, 2003)。その効果は専門職養成の過程においても有効性が示されており、例えば田島(2008)は大学・大学院時代にボランティアの中での心理臨床現場の体験が、後の心理臨床活動における実践活動のための知識や技能の習得に繋がる可能性を示唆している。杉本(2013)によると、学校などでの教育領域でのボランティア活動の派遣を行っている大学は教員養成課程の大学がほとんどであると報告している。このことから職業養成とボランティアの関連が深いことが見て取れるだろう。

ボランティア活動は将来の専門職としてのキャリアに繋がる体験であると考えられるが、一方で野村(2017)は、その学習的側面に重きを置いた教育カリキュラムにおけるプログラムと混同されてしまっていることを指摘している。カリキュラムとしての取り組みは評価が伴うが、ボランティアの本質から考えるとあくまで学びは副産物であり、個人の“気付き”で

ある。学ぶことを「ボランティア」と冠して他者に強いられる状況は「要請動機」を高めてしまう可能性があるだろう。

「要請動機」を高めるもう一方の要因として考えられるのがボランティアに対するイメージである。このイメージにはポジティブなものだけに限らず、「否定」や「強制無責任」といったネガティブイメージも含まれる(荒井, 2016)。荒井(2016)は、これらのネガティブイメージが不参加志向動機を高める要因にもなることを示しており、こうした学生たちに対してはネガティブイメージを下げ、肯定的イメージを高め、自発的に参加したいと感じてもらえる枠組みが必要であると述べている。

これらを合わせて考えると、ボランティア活動を促進させる動機付けが重要ではないかと考えることができるだろう。専門職養成課程において「ボランティア」の体験が強要して参加するものではなく、自発的に参加したいと思えるような情報提供などが必要ではないかと考えられる。また、自発的な参加に繋がったとして、継続していく中での支援も検討しなければならない。本研究でサポートとして効果を示したのは「評価的サポート」であった。ここでの評価とは、肯定的に受容するというニュアンスを含むものである。こうしたことを踏まえると、授業評価などとは切り離したうえで、こうした肯定的受容に繋がるような環境設定が望まれるだろう。環境設定の例としてはボランティアコーディネーターなど、大学教員以外の関わりが挙げられる。大学側にはそうした環境設定などを通して、過干渉になりすぎないサポート体制の構築があることが必要であると考えられる。

3.課題と展望

本稿は、有意なモデルが得られた「対象者との関わり」について考察しているものである。しかしながら、対人支援ボランティア場面ではそれ以外のストレスラーも当然起こりえるため、それらに対して有効な支援の手立てを考察するに足る結果が本研究では明らかにできなかった点は大きな課題である。また、「対象者との関わり」における考察の中でも、横断的調査での考察であるため、因果関係やモデルとしての検討は不十分であり、今後の課題である。

展望として、まず課題に挙げた点について改めて検討することが望まれる。例として、実際にボランティアコーディネーターを配置している大学とそうでない大学における比較検討や、新規にコーディネーターを配置することによる縦断的な調査のような環境面についての検討が行えるだろう。加えて、本研究では交互作用における意味づけの考察において、ストレスラーは否定的側面だけでなく、場合によっては成長に寄与する可能性が考えられた。ストレスラーを除去するだけでなく、これらを成長の糧とするようなサポートについても検討していくことが望まれるだろう。

付記

本研究は日本カウンセリング学会第55回大会にて発表されたものである。調査にご協力いただいた大学生の皆様、調査の窓口となっていた大学の先生方に深く御礼申し上げます。

引用文献

安島 進市郎 (2002). ヒューマン・サービス提供組織のボランティア・マネジメント 経営學論集, 72, 268-269. https://doi.org/10.24472/abjaba.72.0_268

安島 進市郎 (2003). NPOにおけるボランティア満足——プログラム利用者としてのボランティア—— 社会・経済システム, 24, 73-79. https://doi.org/10.20795/jasess.24.0_73

Bower, J. E., Kemeny, M. E., Taylor, S. E., & Fahey, J. L. (1998). Coping processing, discovery of meaning CD4 decline, and AIDS-related mortality among bereaved HIV-seropositive men. *Journal of Consulting and Clinical Psychology, 66*, 979-986. <https://doi.org/10.1037/0022-006X.66.6.979>

橋本 剛 (2005). ストレスと対人関係 ナカニシヤ出版

広崎 純子・酒井 朗・千葉 勝吾・風間 愛理 (2006). NPO活動におけるボランティアの学びと成長——高校生の進路選択支援活動に携わる学生を事例に—— お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要, 3, 113-122.

石本 雄真 (2004). 大学生のボランティア活動の動機 日本青年心理学会第12回大会発表論文集, 40-42. https://doi.org/10.20688/jsyapp.12.0_40

岩佐 俊輔・山本 眞利子 (2008). ロールプレイを用いた構成的EGが対人援助ボランティア学生のストレス低減に及ぼす影響 久留米大学心理学研究, 7, 87-93.

亀田 凌雅・中地 展生 (2021a). 大学生用対人支援ボランティアストレス尺度作成と信頼性・妥当性の検討 帝塚山大学心理科学論集, 4, 37-45.

亀田 凌雅・中地 展生 (2021b). 大学生の対人支援ボランティア場面でのストレスについて研究——参加動機と期待するソーシャルサポートとの関連—— 日本応用心理学会第87回大会発表論文集, 33.

上條 菜美子・湯川 進太郎 (2014). ストレスフルな体験の反すうと意味づけ——主観的評価と個人特性の影響—— 心理学研究, 85, 445-454. <https://doi.org/10.4992/jjpsy.85.13047>

片受 靖 (2016). 新大学生用ソーシャルサポート尺度と精神的健康, 援助要請スキルの関連についての研究 立正大学心理学研究所紀要, 14, 65-70.

片受 靖・大貫 尚子 (2014). 大学生用ソーシャルサポート尺度の作成と信頼性・妥当性の検討——評価的サポートを含む多因子構造の観点から—— 立正大学心理学研究年報, 5, 37-46.

菊島 勝也 (2002). 大学生用ストレス尺度の作成—ストレス反応, ソーシャルサポートとの関係から 愛知教育大学研究報告 教育科学, 51, 79-84.

菊島 勝也 (2003). ソーシャル・サポートのネガティブな効果に関する研究 愛知教育大学教育実践総合センター紀要, 6, 239-245.

厚生労働省社会・援護局地域福祉課 (2007). ボランティアについて Retrieved July 31, 2023 from https://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/12/dl/s1203-5e_0001.pdf

小山 敦子・保田 佳苗・仁木 稔・平野 智子・陣内 里佳子・岩上 芳・長野 京子 (2003). 医療・福祉関係者は疲れている——ケアを供与する側のメンタルヘルス—— 心身医学, 43, 679-688. https://doi.org/10.15064/jjpm.43.10_679

Lazarus, R.S., & Folkman, S. (1984). *Stress, Appraisal, and Coping*. New York: Springer Publishing Company (リチャード S.ラザルス・スーザン・フォルクマン 本明 寛・春木 豊・織田 正美(訳) (1991). ストレスの心理学 認知的評価と対処の研究 実務教育出版)

Maniaci, M. R., & Rogge, R. D. (2014). Caring about carelessness——Participant inattention and its effects on research—— *Journal of Research in Personality, 48*, 61-83. <https://doi.org/10.1016/j.jrp.2013.09.008>

皆川 州正 (1999). ボランティアの悩みに関する研究——学生ボランティアを対象とした悩みとその解決の調査—— 社会福祉研究報, 10, 38-47.

三浦 麻子・小林 哲郎 (2018). オンライン調査における努力の最小限化が回答行動に及ぼす影響 行動計量学, 45, 1-11. <https://doi.org/10.2333/jbhm.45.1>

中地 展生・亀田 凌雅・山口 祐子 (2023). 大学生がつなぐコミュニティの未来 人間性心理学研究, 41, 7-14

野村 和代 (2017). 教育領域におけるボランティア学習の位置づけと今日的課題の一考察——教職学生の指導プログラム開発の必要性について—— 常葉大学教育学部初等教育研究実践報告誌, 1, 53-58.

日本学生支援機構 (2009). 平成20年度大学等におけるボランティア活動の推進と環境に関する調査報告書 Retrieved July 31, 2023 from <http://www.jasso.go.jp/sp/about/statistics/volunteer/2008.html>

岡安 孝弘・嶋田 洋徳・坂野 雄二 (1993). 中学生におけるソーシャル・サポートの学校ストレス軽減効果 教育心理学研究, 41, 302-312. https://doi.org/10.5926/jjep1953.41.3_302

Park, C. L. (2010). Making sense of the meaning literature——An integrative review of meaning making and its effects on adjustment to stressful life events—— *Psychological Bulletin, 136*, 257-301. <https://doi.org/10.1037/a0018301>

妹尾 香織・高木 修 (2003). 援助行動経験が援助者自身に与える効果——地域で活動するボランティアに見られる援助成果—— 社会心理学研究, 18, 106-118. <https://doi.org/10.14966/jssp.KJ00003722530>

杉本 希映 (2013). 大学生による学校支援ボランティアの現状と課題 目白大学心理学研究, 9, 107-119.

田引 俊和 (2005). 知的障害者のスポーツ活動を支えるボランティアの参加動機に関する研究 愛知淑徳大学医療福祉研究, 11, 85-93.

田引 俊和 (2008). 障害者スポーツを支えるボランティアの参加動機に関する研究 医療福祉研究, 4, 98-107.

田島 佐登史 (2008). 臨床心理士養成指定大学院の院生が考える修了後に役立つ学習と体験 目白大学心理学研究, 4, 35-48.

富重 貴志 (2002). 学生のボランティア動機に関する探索的研究——超高齢者への談話ボランティアに対する学生の意欲との関連—— 明治学院大学大学院文学研究科心理学専攻紀要, 7, 43-53.

和田 実 (1989). ソーシャルサポートに関する一研究 東京学芸大学紀要, 40, 23-38.

山本 陽一 (2018). ボランティア体験が中学生と高校生のボラン

- ティア活動意欲に及ぼす影響 応用心理学研究, 44, 21-33. https://doi.org/10.24651/oushinken.44.1_21
- 米澤 美保子 (2010). ボランティア活動の継続要因 関西福祉科学大学紀要, 14, 31-41.
- 吉田 渉人・徳田 智代 (2012). 対人支援ボランティアにおけるボランティア満足とバーンアウトの関係 久留米大学心理学研究, 11, 108-116

Social Support for Mitigating Cognitive Evaluation of Stressors of Interpersonal Support Volunteerism Among University Students: From the Viewpoint of Motivation for Participation

Ryoga KAMEDA and Nobuo NAKAJI

Abstract

This study examines the type of social support that is effective in alleviating cognitive evaluation of stressors among university students engaging in interpersonal support volunteerism. Scholars consider that the motivation to participate in such activities is related to the effectiveness of social support provided; thus, this study examines the effect of this motivation. A survey was administered using an online response form (Google Form/Freasy) to 132 university students enrolled in Japanese universities with experience as interpersonal assistance volunteers. It conducted hierarchical multiple regression analysis with a subfactor called interpersonal support volunteer cognitive evaluation of stressor as the objective variable and motivation for participation, social support, and their interaction terms as explanatory variables. The results demonstrated that the model, including the interaction term, was significant for “relationship with the recipient of support” as the objective variable. Furthermore, the findings indicated that university students participating in activities due to others’ requests were more likely to be stressed by the “relationship with the recipient of support,” which is similar to the results of Kameda and Nakaji (2021b). As an interaction effect, positive feedback to students participating in the program was effective in suppressing stress in the “relationship with the recipient of support.”

key words: Interpersonal support volunteers, cognitive evaluation of stressors, social support, motivations for participation